

松崎英司歌集

『影もめだか』

(角川書店)

第二歌集。十年余の作品四八一首を収める。著者は和食料理のシェフとして経歴を積んできた。当然そうした仕事関係の歌が多く、さまざまな食材が登場して来るのは、目を見張らされる。ただ自らが食べた飲んだりする歌はほとんど見られず、大変に禁欲的な態度に思える。

禁欲的な姿勢は歌の詠み方、歌集のまとめ方にも表れている。漢字表記が多く総じて具体性に富んだリアリズム系の歌が大半を占めるが、ルビが振られているのはわずかに数首。詞書は全くない。また一字空けが一つもないのは、比喩が少ないのと合わせて、現代短歌の一傾向に対する著者の立場の表明でもあるのか。句切れの少ない、なだらかな調べもまた特徴的である。

鯛の目を掌に覆ひ突く出刃に受くる瘡
撃かなしくもなし

料理には人柄出づると思ふまで夏の小
芋をひたすすらに剝く

エレベーターに見知らぬ人と乗ること
を拒みて選ぶ暗き階段

(津金 規雄)

奥村知世歌集

『工場』

(書肆侃侃房)

工場という、女性の少ない現場で働く筆者が、職場や家庭における自分の姿を客観的かつ理知的な筆致で描いている。「安全靴」「防炎布」などの具体的な語彙から浮かび上がる職場、二人の子の母としての家庭、どちらもくつきりと描かれており、その中には、人々の先入観や決めつけにさりげなく切り込む歌も多い。

軍手にはピンクと黄色と青があり女性
の数だけ置かれるピンク

父親のみ「不存在」という項もあり保
育申請理由記入書

私はこの筆者の的確で無駄のない比喩、
特に直喩の豊かさに心惹かれた。それは時

にほの暗く、死の影を思わせることもある。
動脈のケーブルの離線完了し看取りの

ごとく軍手で触れる
噴水に子どもが次々入りゆく夏に捧げ

る供物のように
声高な主張ではなく淡々と現場を描写し、

鋭く切り取る筆者のまなざしの確かさ。
「職場詠」の一言では括り切れない、骨太

で豊かな歌集だと感じた。(高橋みどり)

瀬戸夏子著

『はくなくみぎうみ分光器 alert 2000
現代短歌クロニクル』

(左右社)

「歌集を買ってみたい、(中略) この本はそんな人に向けたブックガイドとして企画された(帯文より)」。二〇〇〇年以降に発刊された歌集五十五冊について、代表歌を挙げながら紹介している。個々の歌の解説が詳細で説得力がある。

吉川宏志の『夜光』の項において「死ぬことを考えながら人は死ぬ茄子の花咲くしずかな日照り」に対して、高野公彦の「少年のわが身熱をかなしむにあんずの花は夜も咲きをり」を引き、上句の〈情〉+下句の〈景〉のパターンについて論じる。

また、歌集の意義についてのコラムも挟まれており、「第一歌集を出していない」と歌人として認められないことも多い」と著者は歌集出版を推している。

「インターネット上で『うたの日』など互選多数決型の短歌投稿サイトが生まれ、盛況である」、「一方、(雑誌内の)穂村弘の『短歌ください』から次々と歌集デビューする歌人がある」と瀬戸は指摘する。短歌もどんどんと多様化してゆくのだと感じた。(伊藤 祐楓)